

■ 練馬大鳥神社 . . .



春を待つ 事の始めや 酉の市 (其角)

いよいよ霜月を代表する行事「酉の市」が近づいてきました。寒風吹き始める頃、練馬駅前の大鳥神社境内とその周辺には、ずらりと屋台のお店が並びます。まさに練馬の風物詩です。

酉の市の象徴は、何と言っても「縁起物の熊手」です。それは実用品の熊手ホウキではなく、おめでたい物をこぼれんばかりに散りばめた装飾品としての熊手のことです。これは、本物の熊手ホウキが落ち葉をかき集めるがごとく、来年の運や福をはき込むとの縁起からで、商売繁盛を願う商人を中心に、市井の人々までもが殺到して買い求めます。そして、売買が成立すると、店員と客が手打ちで締めますが、これが境内のあちこちで沸きおきると雰囲気も最高潮となります。

今年は、一の酉（11月5日）、二の酉（11月17日）、三の酉（11月29日）の3回あります。三の酉まである年は、火事が多いとの俗説があり、熊手商の多くは縁起熊手に「火の用心」のシールを貼って売り出します。とはいえ、露店商にしてみれば、酉の市が2度か3度かは生活に直結する大問題でしょう。3度あった方が当然、商売のチャンスが増え、収益も上がるのですから。

それに関連するのが「酉の市の売れ残り」という比喩表現です。国語大辞典（小学館）には、

「醜い女を指す言葉。酉の市で売る熊手についているお多福の売れ残りの面のようなできの悪い顔の意からとも、酉の市の夜は、吉原遊郭が繁昌するのに、そういう日にさえ客のつかない醜い顔の意からともいう」

とあります。どこかでこっそり使ってみたい言葉です。

最後にご紹介すべきは、酉の市の起源です。これについては、都内随一の賑わいを見せる「浅草の酉の市」のHPにその縁起が紹介されています。

酉の市の始まりは、江戸近郊に位置する花又村（現在の足立区花畑にある大鷲神社）であるといわれ、祭りの形態も、当初は近在の農民が鎮守である「鷲大明神」に感謝した収穫祭であったと伝えられています。祭りの日、氏子たちは鷲大明神に鶏を奉納し、終わると集まった鶏は浅草の浅草寺まで運び、観音堂前に放してやったといわれます。

文字通り「鶏の市」だったというわけです。